

非情の庭

樋口茂子

三一書房

庭の情非

樋口 茂子 著

三一書房

著者略歴

昭和三年 静岡縣清水市に生れる
 昭和九年 奉天彌生小學校入学
 昭和十五年 大連伏見台小學校卒業
 昭和二十年 京都市立堀川高女卒業
 高女三年在學中、腎臟を病み、以後
 數年閉病生活を送る。現在静養中

一九五七年七月二十五日発行
 一九五七年八月三十日四版發行

非情の庭

定価 二九〇円

樋口茂子

田畑弘

著者
 発行者
 印刷所
 製本所

検印
 廃止

三一書房

発行所

株式会社 三一書房

京都市中京區錦通西福院西入ル
 弘栄印刷株式会社
 京都市南區南梅小路堀川西
 新生製本株式会社

京都市左京區北白川西平井町二
 電話 三二〇一
 支店 京都大田 電話 四一〇三
 支店 京都千代田 電話 一〇一
 支店 東京 電話 八四一
 支店 東京 電話 六〇〇
 支店 東京 電話 四〇〇

序 章

都築についての新聞記事を見て以来の私は都築のことをはなれては何も考えられない心の状態となっていた。やがてその年も夏を迎えた頃は、私にもようやく平静がもどってきていた。私はその頃は、都築は既に処刑されたのだと堅く信ずるようになっていた。既に例の悲報の日から、半年という月日の流れは否応なしに、冷静に現実を直視しなければならぬ気持ちにまで、私を追いつ込んでいたのである。

それは、昭和二十四年二月二十一日のことであった。当時私は、長年悩み続けた胸椎カリエスもほぼ全快に近い状態にあったので、めったに床づくことはなくなっていた。その朝も自分で床をあげると、すっかりさわやかな気持ちになって、目当りのよい縁側で新聞をひろげていた。その日の三面には前日の大火の惨状が精しく報じられていたが、その片隅に、「十四名に死刑」という小さい見出しを見つけて、いつも戦争裁判のことを聞く度に覚える、胸の内のきゅつとしまるような緊張にこわばりながら、そのUP電をしすかに読み進むうちに、海軍中尉ツツキタケオという名を発見した。

十四名に死刑 比島法廷判決

「マニラ十九日発 UP 共同」フィリッピン軍事法廷はケソン州インファンタ市で残虐行為を行った元海軍士官十四名に対し、十九日絞首刑の判決を言渡した。各戦犯の氏名次の通り（音訳）

ツヅキタケオの名はその中ほどに、そのみ片仮名で記されていた。ツヅキタケオ、それはまぎれもないあの人に違いない。私は冷静な目で、暫くはその小さなカタカナの活字を見つめていたが、次第に文字がうすれて大きくゆれるので、新聞を掴んだなりふらふらと立上った。一瞬の意識に、なごんだ色の庭一面が浮き上るかのようには思われた時、ふいに血の凍るような衝撃に続いて、痙攣が全身をおそってきた。周囲のものが、すべて、大きくゆらぐかのようにだった。私はすっかり障子を掴まえると、そのまま激しく睨上げている。ガラスの外のけぶるような白い日射の中に、万年青、躑躅、青木等の緑の濃淡が縞目の流れるようにゆらぎ続けていたのを、今でもはっきりと覚えている。

それから数日は全く茫然とした状態であつた。私は考えるという心の働きを殆ど失っていた。ただおぼろげな意識の底に、学生時代の都築の面影をぼんやりと思いうかべることもあつたが、悲しいとかつらいとかいった感情は全然ともなわなかつた。私は一日おきに通つていた病院への行き帰り、ようやく緑の色のみえはじめた畠や、比叡を頂点として南へ流れるなだらかな山々の起伏が、何の感興もなく、ただ形のなり鮮かに意識の中にくい入るのを、始めて見る物に対するような熱心さでじつと眸をこらし続けていた。やがて日と共に私の心の内は、狂おしい憤りとこらえようもない悲しみとにみたされていった。

私は既に都築は戦死したものと信じきつていた。都築がマニラの特攻隊員であつたこと、消息が全然知れないことを、二年前新藤正幸から聞いた時、私の心には、ああやはりそうであつたのか、あの方も家にいらつしやつていた他の大勢の方々と同じ運命に倒れてしまわれたのだ、という、なれきつた通り一片の同情が

かすめたに過ぎなかった。その日以来都築という人は、私にとって消え去った人でしかなかったのに、ふいにはるかな過去が逆写しになって目の前にかえって来たのである。

都築武雄と始めて会ったのは、あの戦の始まった翌年、昭和十七年の三月のことだったと記憶している。燈管のほの暗い明りを受けて玄関の片隅に、高校生の都築は白線の帽子をかたくにぎりしめて立っていた。新藤と深見の二人は上靴に履かけて、靴をぬぎかけていた。

私はあの頃女学校の二年生、姉は三年生だった。当時兄の後輩の大学生や高校生達の出入は非常に多かったけれども、この方達は私の家に泊って大学をお受けになるのだ。是非お入りになるように——と、いう特別の心から私には三人の来訪が待たれてならなかった。

姉と私の気配を感じ取ったのか新藤と深見は機敏な動作で立上った。その間にはさまれて長身の都築はややうなだれながら静かなまなざしを私達に注いでいた。陽焼した額に髪が乱れて影になった頬がくっきりとそげて暗かった。

私は少女の心に、新藤と深見には直接心のとどくのを感じたが、都築の静かな影にこもる姿は心に深くしみ入るのを感じはしたけれども、決して親しめる人という印象は受けなかった。

三人の青年達は揃って京大生となって親しく遊びに来るようになった。私は新藤とはすぐに友達になった。少年のような無邪気さをそのまま持続ける彼と女学生の私とは丁度よい話相手であった。お互に意地を張り合ったり争ったりすることもあったが、すぐに又仲直りした。深見はやさしい人であった。兄が兵隊に征って女三人だけになっている家庭の中のことに何かと心を配っていた。その二人の人達にくらべると都築が私に与えた印象はあまりにもうすく、その性格もその考えも形のあるものとしては残っていない。しかし

その輪郭の淡さ故に私の心にしめる部分は大きかった。学生達は都築のことを音声とまじざしという言葉で表現していた。都築はその深くすんだ聲でひたと人に見入るくせがあった。僅かな微笑を口元にたたえることはあってもその切長の目は悲しげな表情を決してくずすことはなかった。

たしかに三人が京大に入ってから間もない頃のことだったように思う。その頃都築と深見は元田中の同じ下宿にいた。私達母娘三人と都築と深見は誘い合わせて比叡山に行ったことがあった。私はその約束の前日から急に咽喉の淋巴腺がはれてすっかり憂鬱になっていたが、姉になだめられて丹後縮緬の派手な友禪の着物に紫紺の袴というなりをさせられて、約束の修学院駅に行った。都築と深見はとくくに来て待っていた。八瀬まで留電で、八瀬からはケーブルで比叡に登った。くもり日ではあったけれど、ほのぼのと薄曇りの色が流れる一望の京の眺めは、春めいて美しかった。根本中堂から坂本までの間は、道をよく知っている姉と私とが先に立つておりていった。道筋の松の緑のきれめに、ふいに琵琶湖があらわれた時私達は驚きの声をあげた。木々のすき間にのぞかれるその僅かの湖面は、絹鹿の陽射をにぶく照返して布地のように重たげに見える。阪本に降りると姉と私は蓮華や蒲公英の花をつんだりするので皆からおくれがちであったが、都築は何回も立止っては私達を待っていた。阪本ではつろきでお蕎麦をいただいた。船に乗ると湖面をすれすれに風が吹きついていた。薄絹の裾をへだてたようなあたりの景色であった。雲の合間から、時折ちらちらと出るんだような陽射が流れて、白く波が泡立った。西には比叡山脈の山々が深い霧ながら、ほのかな青みをこめて眺められた。姉と私はびったりと肩を寄せ合っていた。赤く塗った玩具のような練習機がすいすいと雲間をすべって、見る間に大きくなり水面に浮かんだが、そのまま舞上っていった。

「赤トンボね」と、姉は云った。

都築と深見は私達の方を見ながら、時々二人で笑み交していた。

都築は秋に入ってから、七月に病を得て復員して来ていた私の兄の世話で、当時修学院に住んでいられた兄のお友達、佐伯氏のお宅に石田と二人で下宿することになった。それ以後は殆ど毎晩のように遊びに来るようになったので、何かと話合う機会が多くなった。

都築は早く両親を失って、都築とは双生兄の兄と、二人の弟と、既に嫁がれた二人の姉の六人姉弟であること、両親の残された遺産で四人の兄弟がそれぞれに勉学に励んでいることは、都築と同じ東京出身の新藤や深見から精しく聞いて知っていたが、都築自身の口からは、それ等のことについては殆ど語られるということがなかった。

都築は読書の好きな私が、読んだばかりの書物についての感想を夢中になってしゃべり続けるのを、いつも静かな態度で聞いてくれた。そして時には、私の言葉をそのまま静かな自分の声で味わうように、繰返してみるのがあった。

その秋に私は前髪をあげた。短い毛はピンにはおさえきれないで、いつも幾筋かの毛を額にこぼしていた。都築は本を読むひまひまにやさしい手つきで、おくれ毛をかきあげてくれた。本を読むのをやめて都築を見ると、視線のやり場に困ったように、長い睫の蔭に眸をかくしてしずかに微笑むのであった。私は小さな文庫本の上に都築と顔を寄合うようにして、万葉の歌を朗読してきかせた。

兄は復員後ずっと家で静養していたが、深見や新藤のことについてはいろいろと話しながら、都築のことについてはたえて語ろうとはしなかった。新藤や深見も都築の人柄については何も語ってはくれなかった。ただ都築より一、二年先輩の人達は都築のことを度々話題にしていたが、それは決していいものではなかった。手におえない乱暴者だとか、精神的に弱いか、自分のことをすこしでも批判されるとひどく逆上するなど云う言葉が、そばにいる私の耳にもいや応なしに入るのだった。私は胸のうずくような気持で聞いて

いた。都築のことをそのように云う人達にくらしかった。

冬に入ってから私は体を悪くして床づいていた。背や脇腹に刺すような痛みがあつて微熱が続いた。寒さのきびしい日は体の節々に脈のよせるよううずきが走った。病名はなかなか分らなかつた。新藤には仮病だろうと云われた。

その頃は食糧がとぼしかつた。家では病人をかかえていたので、食糧を手に入れる為に母は大変な苦勞をしていた。兄の後輩の大学生達もいつも空腹を訴えていたので、お肉やお米などが手に入った時は出来るだけ内で食事をあげるようにしていた。めずらしい物が手に入ると姉が佐伯氏のお宅に都築と石田を呼びに行った。電話で新藤や深見を呼ぶこともあつた。闇で手に入れた食物を見ると青年達は目を輝かせながらも、「こんなにまでして頂いてもいいのでしょうか」と云うのだった。やまばなのふたばで戦前と全然変らないおはぎを売る日があつた。朝早くから並ばなければ買えなかつたが都築はよく並びに行つては、病気で寝ている私へのおみやげに持つて来てくれた。新藤と深見はどこからか炭を手に入れて度々届けてくれた。

十八年の正月にはようやく私の病氣は脊髄カリエスとわかつて、学校は当分休学することにした。

正月に都築と石田とかるた取りをして遊んだ時のことだった。都築はしのぶれど……と、こひすてふ……と二枚の読札を手にとって、どちらがすきかと聞くのだった。わからないと答えると、都築は宮中の御歌会の折、しのぶれどがいいときまつた経緯や、その結果こひすてふの歌を作つた壬生忠見が失意の人となつたことなどを、いつにない熱っぽい口調で話してくれた。私は華やかな和服姿で、炬燵に頬杖をついて都築の言葉聞いていた。冷きつた闇の中に二人の青年を送り出した後、とりちらけた部屋の中はたとえようもなくわびしかつた。私はその夜から本当に床づいてしまった。

それでも私の体の方は割合に順調で、四月の新学期からは時々は学校にも出られるようになったが、一時

よかった兄の病氣は三月末頃からは、日に日に重くなる一方であった。当時父が外地にいて、家には他に男手がないので、女では出来ないような仕事があると、姉が佐伯氏のお宅を尋ねて都築に来てもらっていた。ごく近所にもやはり兄の後輩の京大生が下宿していたが、兄はいつも都築を呼ぶようにと云うのであった。夏休みを過ぎた頃から兄はしきりに、もう大学生達も着いて勉強出来なくなるのではないかと、いうようになった。事実春頃から戦況は次第に不利になり、山本連合艦隊司令長官の戦死、アッツ島の玉砕などの悲報が相ついで入っていた。又軍では飛行予備学生、陸軍特別見習操縦士官というものを、大いに宣伝して募集しはじめていた。新聞は毎日のように各大学の志願者の数を報道していた。京都では立命館大学が最も志願者数が多いなど出ていた。

「軍はあせているのだ、もう戦争もあまり長くはあるまい。こんなことをするようになったからには、他の学生達の動員も近いだろう」

その頃の私は戦争のことについては、兄の言葉が無条件に信ずるようになっていた。政府の方針を堂々と非難し、「大政翼賛会」と書いた紙を表に貼るようにと町内会から配ってきた時も、軍に身売りした政友会や民政党を支持する必要があるか、と云って門に貼ることを許さなかった兄やその友人達と比較すると、都築達の年代の人達は、私の目にも人間としてはまだ未熟なように思われていた。

「○○教授があのように云われるのだから、いずれそうなるのだろう」

「この前の政府発表がこうだったから、我々もそうすればいいのだろう」

都築や新藤達の政治的な方面の話は、いつもそうした域を出ないのであった。彼等は人間としてそれぞれの性格はひどくまちまちなのに、その考えていることは型にはまったようにいずれも全く同じなので、私はあきれてしまうことが度々だった。

彼等は日に日に不利な戦況を聞きながら日本に限って例えどのようなことがあっても敗ける筈はないと、言い合わせたように主張していた。特に新藤は日本は神国だとか、日本人には大和魂がある等ということとを真剣な表情で語るのだった。たしかアツツ島の悲報が入った頃のこと、新藤と都築が一緒に遊びに来て、私のそばで戦争の話をしていた。彼等は真珠湾で戦死した特別攻撃隊員のことを感動的に語りあっていた。例え戦力は劣っていても物量はとほしくて、そうした尽忠無比の青年達がいる限り戦争に敗ける筈はないという考えが、私には納得出来なかった。人間以外の何ものかの偉大な加護があるという考えを彼等が抱いているのが、私には不満だった。私は二人の話に割り込んだ。私の云い分を聞くと都築は当惑したような微笑をうかべた。新藤は私をにらんで、そんなことを云う人は非国民だ、貴女は何も分らないくせに、どこかで読んだ本の文句をそのままいつているのでしょうか、と云うのだった。私は不機嫌にだまりこんでしまった。二人を相手に云い争うにはあまりにも子供だった。

間もなく学徒達に動員令が来るだろうという兄の言葉は、私を緊張させた。私はまず新藤をつかまえてそのことを云ってみた。

「それは当然でしょう、学問より国家の方が大切にきまっている。動員令がきたら僕は喜んで行きますよ」

新藤の言葉は私には意外であった。彼が拝軍主義者であることは知っていたが、彼自身にとって最も重大なことであるから、もっと深刻な言葉を聞けるものと私は期待していたのだ。そのことを私は北沢や深見にも話してみたが、二人とも別に改まった表情などはせずに当然のことのように頷くのであった。一度都築さんにも話してみようと考えていたが、その機会もないうちに秋もようやく深まった頃、突然都築たち文科系の学生達に動員令が下ったのであった。

その時の私の感動は激しかった。私は間もなく学業を捨てて入隊しなければならない青年達が見舞いに来ると、その姿を見ただけで涙がこみあげてきた。彼等が京都を去らなければならない日迄は僅かしなかつた。私は別れを告げに来る青年達とは誰とでも熱心に語り合つた。

「御無事に帰っていらつしやらずにちやいけないのよ」

私はその言葉を誰に向つても懸命な気持ちで繰返した。都築と新藤は海軍に征くことにきめていた。他の人は皆陸軍であつた。都築は航空隊に入ると云つた。その日は久しぶりに炬燵に向ひ合つてあつてゐた。床の間の瓶に私の生けた黄色い菊の花が咲き乱れてほのかな香をただよわせていた。都築の顔にはいつにない激しい決意があつた。がその表情はむしろ明るかつた。私は都築のはつきりした態度にややたじろぎながらも、

「どうして？」と、聞返した。

都築は微笑した。その微笑みには影がなかつた。私は二人目の都築を見るような気がした。

「あぶないのよ、飛行機なんて。御無事に帰っていらつしやらずにちやいけないのに——」

「死ぬものですか、決して死にやしませんよ」

都築は驚く程明快な調子で云つた。そして自分の言葉を真実づけようとするように、

「必ず帰ってまいります」と云つた。

帰るとはつきり云つてくれたのは、都築ただ一人だけであつた。誰もが、「無事に帰っていらつしやるように——」と云われると、返事も出来ずに当惑しきつたような表情をするのに、都築がそのように云つてくれたのが私にはとても嬉しかった。私は始めて本当に都築とお友達になれたような気がした。

姉と私は出征される方全部に集まつて頂いて送別会をしたいと強く望んでいた。兄も母も私達の意見に賛

成であったが、その頃兄の容態は急激に悪化し、皆と一緒に食事をするなどとても出来そうにない状態にまでなっていた。兄はそれを非常に残念がつて、二、三人ずつ招待して自分の寝ている側で食事をしてもらうようにしたらどうかと云い出した。何もかも不自由な時代であったが、母は近所の農家などに頼みに行つて鶏すきを御馳走することにした。

十一月二十一日平安神宮で、京都市主催の出陣学徒武運長久祈願祭並に壮行会が行われた。私達の女学生の四、五年生は後輩学徒の代表としてその式に参列した。

式後真白い玉砂利を敷つめた参道の両側に終列して日の丸の小旗を振つて出陣学徒を送った。式が始まつた時は初冬を思わせるようなうすら寒い日であつたのに、いつか空は一面に晴れ渡り小春の目が暖く降りそそぐ参道を行進する学生達の表情は、一様に美しく明るかつた。私は先頭を進む京大生達の一隊に誰か知っている方がいらつしやりはしないかと、熱心に陣をこらしたけれど誰も見当らなかつた。青年達は若々しいおもてに燃えるような命をたぎらせて、私達の方を見返えることもせずに歩んでいた。最後の一隊が過ぎた時、その後に引く影法師がためらいがちにゆれるかのようにであつた。私は張り詰めた心がくずれて感傷がこみあげてくるのをおさえることが出来なかつた。

その夜数人の青年達が揃つて挨拶に見えた。早くから非常な秀才として聞えていた岡村が、身体検査の結果は丙であつたのに容赦なく入隊させられるということが暫らく皆の話題になつていたが、いつになく大勢が一緒に集つたので皆何の屈託もなさそうに、若々しい声で冗談を云い合つたり笑つたりしていた。

この方達はもう行つておしまひになるのだと思うと、私はさすがに胸がせまつていつものように気軽に話をすることは出来なかつた。しかし私の心の底には、たとえどのようなことがあつてもここにいられる方達はず必ず無事にお帰りになるのだという、不思議なほど強い確信があつて、いささかもゆるぐことがなかつた。

た。もう当分逢えないのだという事実だけが悲しかった。私は青年達の何の意味もない言葉まですべて心の中にしるしつけておこうというふうに、熱心に耳をかたむけていた。彼等は兄の病気を気づかって早い目に帰っていった。

その夜は美しい星空であった。凍てついた空一面に青ざめてまたたく無数の星のところに白いきらめきが明滅して、青年達の表情を美しく照らし出していた。

「明日もいいお天気ですね」と誰かが何気ない口調で云った。私達は明るくいつものような挨拶を交してお別れした。

その学生達のなかばが再び帰らぬ人となろうとは、その時の私は夢にも考えてはいなかったのである。

第一章

都築が死刑の宣告を受けてから二月ほどというものは、目の前が真暗になるような、苦しい激情の日の連続であった。

ようやく五月に入ってからマッカーサー元帥に都築の為の歎願書を出してみたが何の反応もなかった。友人を介して進駐軍関係者にきいてもらったところによると、外地で裁判を受けた場合は判決後直ちに処刑が行われるからもう生きていないであらうとのことであった。それを聞いた時私はひどくふるえていた。このままではすまされなと思った。

「原告が被告をさばくあやまちを世界中にしらせなければいけない」

私は激して真青になっていた。深く考えるうちに私は落着いてきた。そのようなことが私の力では出来そうになかった。処刑されたのだと信ずる気持は今日明日の命を案ずるよりも、はるかに平静なものであった。が、それはひややかにとざされた永遠の闇だった。もう取返ししようもなかった。それでもどうにかせずにはいられない気持だった。命の激情がないかわりに、しみ入るような暗さがあった。私は涙もなしに、ふいに耐えがたい淋しさにしずむことがあった。そのようなときまって私の心には学生時代の都築の面影が写ってきた。つましい気持がやさしく胸をひたしていた。都築の姿と共に戦死した学生達の姿が、それぞれ

の悲しみをもって胸にせまってきた。かつて戦死した報を耳にした時はそれ程の感傷もなく死なれたという事実をすなおに受入れたのに、どうしてもあきらめきれないこだわりが胸にしこった。何か私にはしななければならないことがあるような気がした。青春を無理強いに死の色に塗るかえさせられた人達が、無言の姿で私に何かを求めているような気がした。その何かがわからなかった。私は一層耐えがたいさびしさにとらわれていった。

私の胸には戦争の犠牲者となった私の三人の肉親達のことと度々かえってきたが、その思い出をこばむ気が動いていた。打撃の生々しさが耐えられなかった。私は強いて肉親達に心をとざした。

戦死した学生達のことをしのぶ時、生きて帰って来た人達のことまでが思い出されてならなかった。それがうかぶ度に怖じけるような気持であった。皆が皆、学生時代の面影を失って帰って来た。年齢の若い人達ほどそのくずれは激しかった。

新藤は終戦の翌年の春たずねて来た。やせて彫の深くなった顔は暫らくはかつてのその人と見定めることが出来なかった。新藤は魚雷艇に乗っていた。本土防衛の特攻隊員であった彼は、終戦の時は宮古島にいたとのことであった。八月十五日の夜、他の魚雷艇と衝突しあつて艇と運命を共にする筈であったが、相手方の魚雷艇が発砲直前にその計画を隊長に発見された為に、ついに今日迄ながらえる結果となったのだと語った。学徒出陣で征ってから二年半の年月の間に、かつての無邪気な少年の面影はすべて失われていた。新藤は終戦直後多くの上級士官達がとつた行動を、泥棒に等しいと罵倒し、

「こんな連中の指図を受けていたのかとなさけなくなりました」と淋しげな微笑をうかべた。

彼は終戦後の社会の頹廢的な風潮を激しくのしつた。しかしその話ぶりには凜と張った青年の清潔さは感じられなかった。何気ない言葉の節々やふとした時の顔の表情にいやな後味を残すくずれがあった。私も

もう子供ではなかった。その背後に横たわる暗黒もほぼ想像がついた。彼が明日の命の保障も得られない特攻隊員であつたことを思う時、そうした生活もやむを得ないものであることはよくわかるのだけれども、あの当時誰よりも親しみを感じていた人だけに私の悲しみは深かった。彼は私の心の動きをうかがうかの様子だつた。私は今では取返ししようもない友情を思つた。そのにこりのない過去がかえつて彼と私とを決定的にひきはなすのを感じた。

私は新藤とは気まずい別れ方をした。その後彼からは何のたよりもなかった。

他にも生きて歸つた人は何人もいた。その人達は次々に帰還の挨拶に來た。私はいつか失望になれていつた。兵隊に征つた人達に共通の、惡をのみ込んだようなふてぶてしさや、脂切つた慾情すらもあきらめの氣持で見えるようになった。その間に私には幾つかの縁談があつた。私はその人達の愛情を信ずることは出来たけれども、その汚濁の中にいだかれにいくことは絶対にいやであつた。それにまだなおきらない体の状態からも、現実の問題としての結婚については全然と云つてもよい程関心がなかつた。

かつて学窓にあつた青年達はすべて社会に出ていった。終戦後の混乱した世相を背景にして彼等の人間の輪郭は一層鮮かに写し出された。

十一月をむかえた時、私は再び新聞紙上で都築についての消息を聞いた。比島関係の死刑囚のうち処刑されたのは僅か二名だけだとのことであつた。都築はいまだに生きている事を私ははつきりと知ることが出来た。ふいに強い脈がうちあげてきた。いまだに処刑されないものであつたら運動なりとしてみたら助かるのではないだろうか——私の胸の内にははつきりとそういう希望が湧いた。死刑囚になつたという報を受取つた時の息づまるような苦しみは殆どなく、ただ都築への同情が熱く胸にこみあげてきた。